

「きぬかけの路」地域の地理的性格

河島 一仁¹⁾・上田 智也²⁾・大迫 孝士³⁾・Khisty Sonali⁴⁾
佐野 洋⁵⁾・鈴木晃志郎⁶⁾・中尾 賢治⁷⁾・黄 銀執⁸⁾・山田 耕生⁹⁾

I. はじめに

立命館大学の衣笠キャンパスの北側には、対面二車線の道路がほぼ東北から南東に通じている。衣笠と宇多野を結ぶこの道路は、行政上では「衣笠宇多野線」と呼ばれている。世界文化遺産に登録される金閣寺、竜安寺、仁和寺などを結ぶこの道路は、まさに観光の道路である。その故か、この道路は「観光道路」ともこれまで呼ばれてきた。そのうちの金閣寺から仁和寺までの約2.5キロが、1991年に「きぬかけの路」という新しい呼称を持つにいたった。

すでに機能している道に、名称を新たに付与することは決して珍しいことではない。左京区に位置し琵琶湖疎水の分線に沿う「哲学の道」はその典型例である。この分線そのものは、明治23年4月に竣工した¹⁾。後年に「哲学の道」と呼ばれることになる道は、おそらくこの竣工時期をさほどくだらない頃には存在していたのであろう²⁾。そしてこの道は昭和47年に「哲学の道」となり、現在では観光名所のひとつとなっている。この道の場合、西田幾太郎や和辻哲郎らのイメージが名称の由来となったと言われている。

一方、「きぬかけの路」は、いわゆる「地域おこし」の運動によって「誕生」した。小稿では、まず道路自体の創設と「誕生」の経緯が紹介される。しかし、運動そのものを分析し、その地理学的説明を試みることは本稿では企図されていない。むしろ、既設の道路に新名称を付与し、それを契機として地域社会を発展させようとする試みが行われている地域の地理的性格を把握することが目的とされる。したがって考察の対象地域は「きぬかけの路」の沿道に限定されず、東は紙屋川、西は仁和寺、南は京福電鉄北野線、北は衣笠山をはじめとする山地で囲まれた範囲である。この地理的範囲を本稿では『きぬかけの路』地域」と呼ぶことにする。

このような地域的な広がりで考察するのは、沿道にだけ視野を限定すると、この「路」が誕生した背景が明らかとならないからである。たとえばこの運動に積極的に協力してきた等持院は立命館大学の南側に位置しており、国際平和ミュージアムも「路」に面しているわけではない。したがって、截頭性が比較的顕著な河川と鉄道などをもとに対象地域の外縁が設定された。そのうえで、「きぬかけの路」地域の歴史的な背景を踏まえつつ、その地域性が明らかにされる。このような作業を経て、この地域の将来像を模索することが可能とな

¹⁾ 立命館大学文学部

^{2~9)} 立命館大学大学院

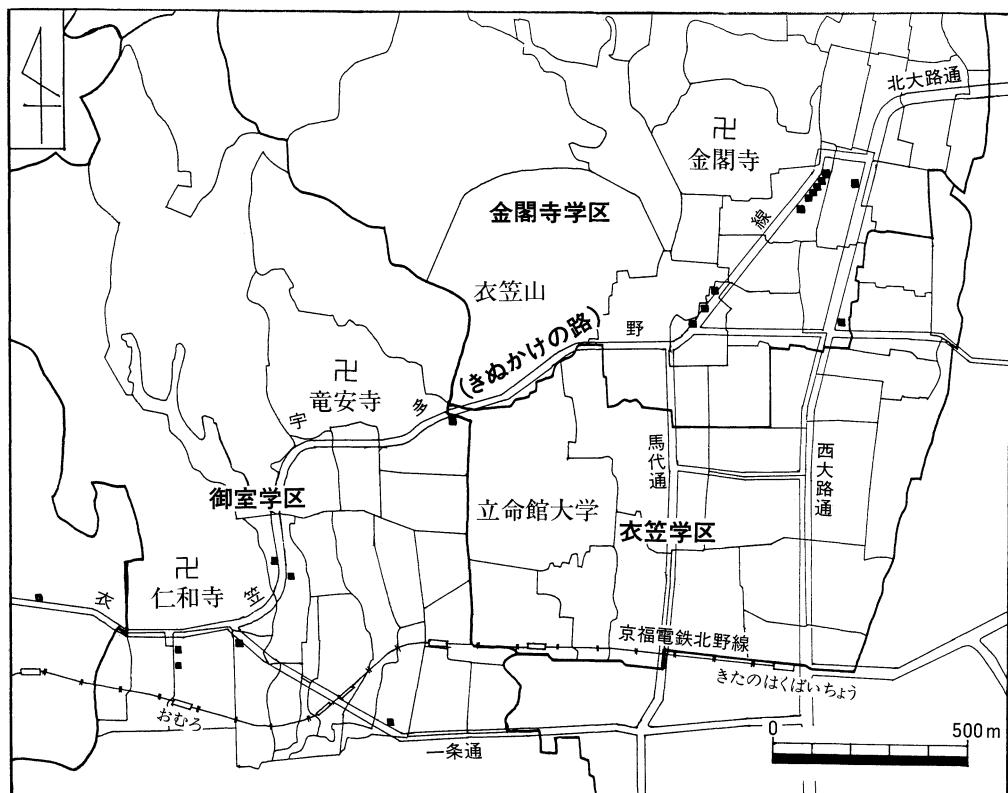
り、ひいては「きぬかけの路」の発展方法を探る糸口が得られると考える次第である。そこでまず、道路の建設についてみていこう。

II. 衣笠宇多野線の創設

衣笠宇多野線が計画されたのは、昭和30年代の高度成長期であった。この時期におけるモータリゼーションによって、自動車台数は急激に増加し、京都市の交通事情を悪化させていった。碁盤目状の道路がもつ限界性や、その狭さなどの歴史的都市の弱点により、交通の混雑が極まり、京都市はその対応に迫ら

れた³⁾。そして道路政策の中心が本格的な道路整備に置かれるようになり、都市計画事業では戦後一時中断していた区画整理事業が再開された⁴⁾。

もう一つの問題は、観光客への対応策であった。昭和20年代には、京都市の発展方向として「文化観光都市」を目指すべきであるとの意見が強く、昭和25年には「国際文化観光都市法」が制定された。あらゆる方面において文化観光都市づくりが中心的課題となり、道路整備に関しても観光都市としての視点からの議論が多くなった⁵⁾。さらに、昭和20年代末期からは好景気による観光ブームがおこ



第1図 主要な道路と「きぬかけの路推進協議会」加入店の分布
凡例：——国勢統計区界 ——町界 ■「きぬかけの路推進協議会」加入店
(大迫孝士 作図)

り、年々増加する観光客への対応策として、主要幹線道路と観光地への道路等の観光道路整備事業が盛んに進められた⁶⁾。金閣寺から御室一帯にかけても道路が狭いうえに、付近の寺や、嵐山および高尾方面に観光に向かう乗用車やバスが多く、そのため交通難の緩和と防災を目的とする道路すなわち衣笠宇多野線が計画されたのである。

その着工は、昭和30年6月のことであった。ただし、竜安寺の一の門から二の門に続く参道を横切る計画であったため。このことに関して府、市、竜安寺の三者の意見がくい違ったことから、工事は一時中断した。工事が再開されたのは昭和34年で、三者間での意見調整の結果、道路位置を南へ50メートル変更することで決着し、第1図に示したように、昭和36年開通した。幅員が11メートルもあるこの道路は、金閣寺から竜安寺を経て仁和寺前で一条通りと合流し、嵐山方面への観光にも威力を発揮した。そのうえ大型消防車が通れる防災道路としても重要な役割を果たすものとなった⁷⁾。以上のように、衣笠宇多野線は観光による交通混雑の緩和、および防災の目的で設けられた多目的道路であった。

III. 「きぬかけの路」の誕生

衣笠宇多野線のうちで、金閣寺から仁和寺までを「きぬかけの路」と呼ぶ運動を進めてきたのは、「きぬかけの路推進協議会」である。この運動が始まったのは平成2年のことであった。関係者からの聞き取りと提供された資料⁸⁾をもとに、その経緯を略述しよう。

衣笠宇多野線に面する『ギャラリー雅堂』の企画担当者らが、金閣寺から仁和寺までの

沿道の店舗に対して一緒に活動を起こすことを平成2年の春に呼びかけた。そしてこの呼びかけに対して、約20軒の店舗が応じたのである。その背景には、古都税問題で有名寺院の門が閉ざされた際に、観光客を主な顧客とする店舗が打撃を受け、受動的に観光にかかるのではなく、積極的に社会に働きかけていこうとする意識が醸成されていたことがある。

そして平成2年11月に、第1表に示したように、7軒の店舗で発起人会が組織された。翌年の3月に、この会が「衣笠古道会」⁹⁾として正式に発足し、衣笠宇多野線のうち金閣寺から仁和寺までの部分の愛称を公募する準備を開始した。8月に、名称は「きぬかけの路」¹⁰⁾と決まり、会の名称も「きぬかけの路推進協議会」(以下、協議会と略称する)に変更された。その後、ウォーキングラリー やショッピングラリーなどの催しを行い、歴史街道推進協議会や京都市観光協会に会として入会し、他の団体との連携をはかっている。

協議会の活動内容で特筆されるのは、次の二点である。第一に、協議会自身が、ガードパイプを竜安寺前と仁和寺前に設置するとともに、衣笠山に接する植樹をおこなっていることである。すぐれた歴史的景観を守ることだけに力点を置くのではなく、自らの努力でより良いものにしていこうという姿勢が、この運動には満ちている。短期的に観光客数をふやそうという発想ではなく、住んでいる人、商売をしている人、そして訪れる人が、その場所にいることに喜びを感じる地域づくりが行われているといえよう。第二に、協議会の会員自らが「路」の清掃を年に10回も行っていることは、運動の性質を考える際の手がかり

第1表 「きぬかけの路推進協議会」のおもな活動

1990年 春頃	ギャラリー雅堂が、金閣寺から仁和寺までの範囲で商売をしている人々に、共に活動を起こすことを呼びかける。
11月	7店舗（京都パストラル、錦鶴、ギャラリー雅堂、花曜、まさあぐうす、衣笠、左近）で発起人会を組織。
1991年 3月	会の名称を「衣笠古道会」とする。金閣寺～仁和寺間の道の愛称募集の準備に着手する。
7月	愛称を全国公募。
8月	応募総数1,249名中から「きぬかけの路」に決定。会の名称を「きぬかけの路推進協議会」に変更。
1992年 9月	ウォーキングラリー開催。
1993年 5月	ショッピングラリー開催。
10月	「きもの国の文化祭」を開催。
1994年 2月	歴史街道推進協議会に団体会員として入会。
10月	ウォーキングラリー、絵画展などを開催。
1995年 8月	京都市観光協会に入会。
11月	ごみ箱を5ヵ所に設置。
1996年 2月	既設のガードレールを撤去し、景観に適したガードパイプを2ヵ所に設置。
3月	桜の植樹を開始。

出典：関係者からの聞き取り、および『きぬかけの路推進協議会』のあゆみによる

りとなる。地域をよりよくしていこうとする日常的な努力が払われていると解されよう。なお、1997年1月現在では、協議会への加入店舗数は19となった。第1図にはその分布も示した。なお、年1回の総会には、諸寺院、堂本印象美術館、衣笠幼稚園、立命館大学なども出席している。それでは、「きぬかけの路」地域とは、いったいどのような地理的な特徴をもっているのであろうか。次章で、地形と歴史的な背景、道路網の形成と都市化、日本画家の居住、人口の構成、観光客の動態など、多角的に明らかにしていくことにしよう。

IV. 「きぬかけの路」地域の形成

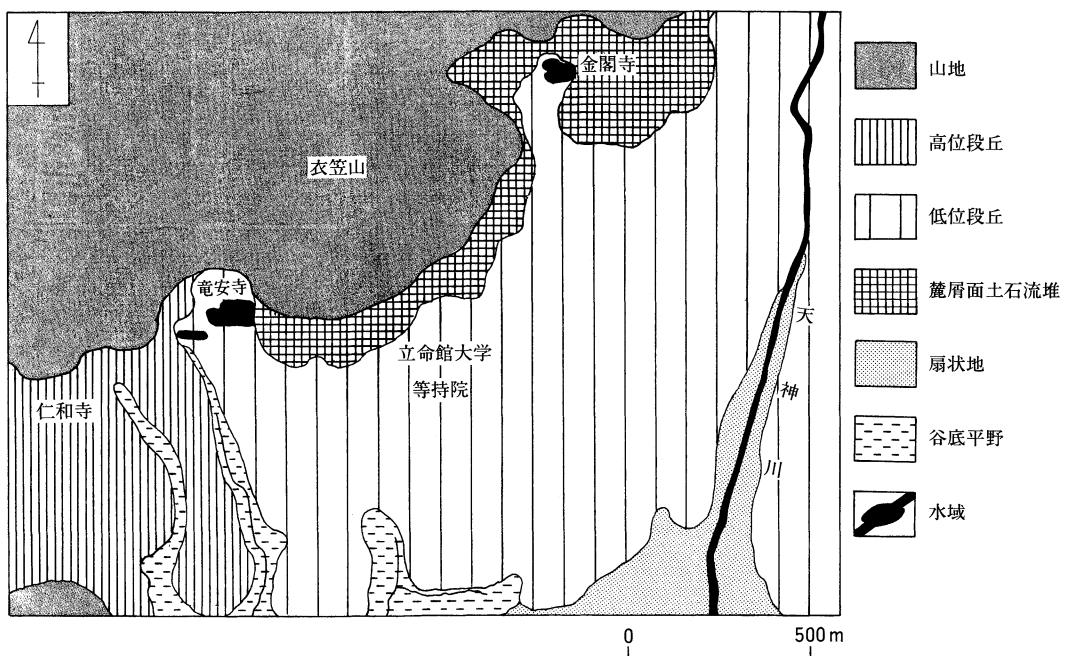
1. 地形と歴史的背景

「きぬかけの路」地域の北側には、チャーチ

トを主とする古生層（丹波層群）からなる衣笠山が位置している。そして衣笠宇多野線は、山地から派生する麓層面や段丘を突き抜けるように付けられた。第2図の地形分類図に明らかなように、立命館大学や金閣寺の一部は、この麓層面土石流堆上に立地している。仁和寺は高位段丘、等持院や竜安寺は低位段丘にそれぞれ立地している。

これらの寺院のうちで、仁和寺の建立はもっとも古く、宇多天皇の仁和4（888）年のことであった¹¹⁾。同寺は、真言宗御室派の総本山である。臨済宗天竜寺派の等持院と臨済宗相国寺派の金閣寺は双方とも14世紀に、臨済宗妙心寺派の竜安寺は15世紀にそれぞれ建立された¹²⁾。

近世には、金閣寺、等持院、竜安寺などの周辺にはそれぞれの寺領が位置していた。野外観察の限りでは、竜安寺道商店街には竜安



第2図 「きぬかけの路」地域の地形分類図
(中尾賢治 作図)

寺が経営する駐車場があることもこの脈絡で説明されるかもしれない。とはいって、近世の寺領が今日の土地所有にどのように遺存しているかは未調査のため判然としない。ただ、宗教、文化財あるいは観光などということだけで、これらの寺院をとらえることはおそらく正確でないことを指摘するにとどめる。

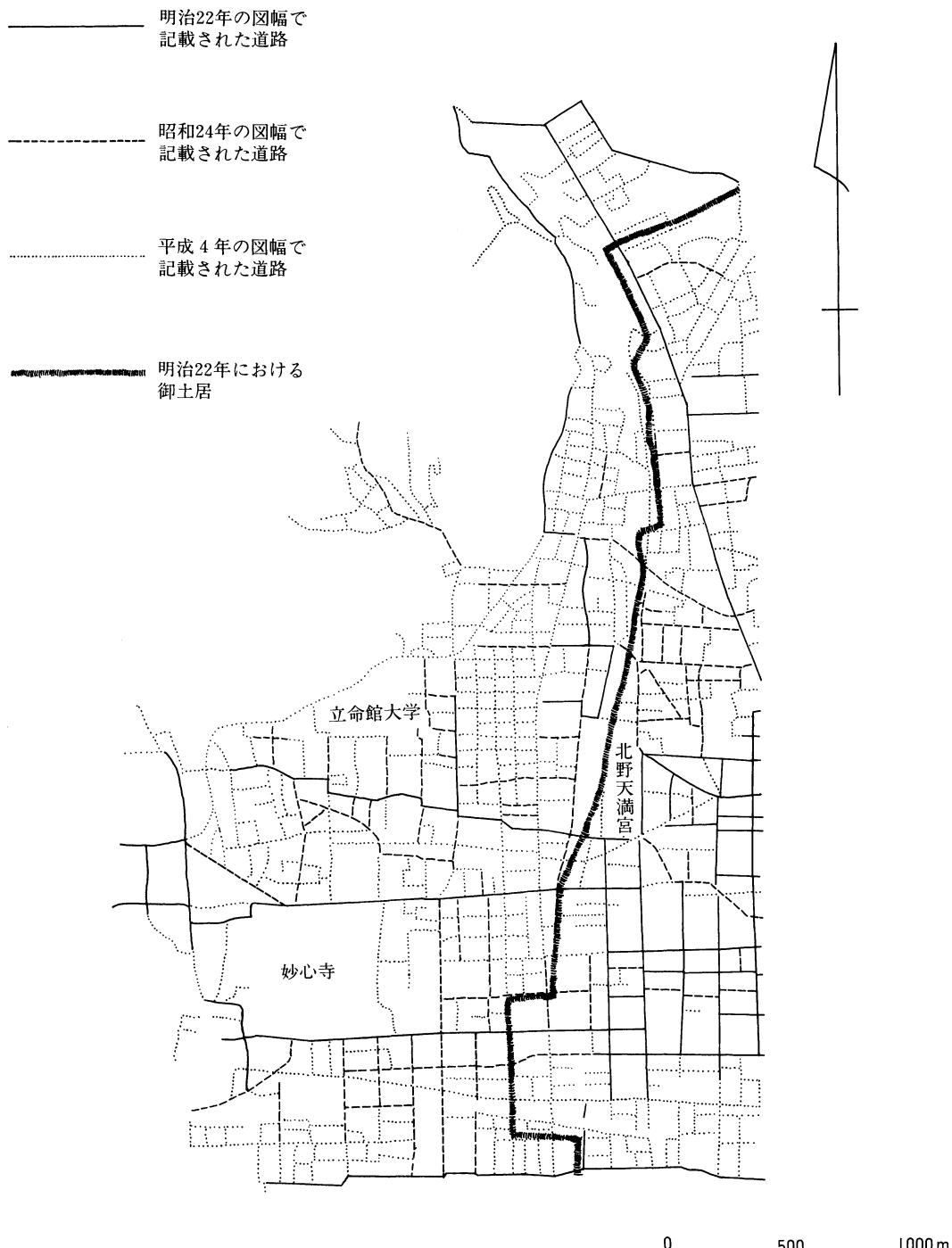
2. 道路網の形成と都市化

道路は、単に交通手段のみを目的にしているのではなく、電気・ガス・上下水道・通信等の他の都市インフラストラクチャーの設置場所としても利用される。したがって道路は最も基本的な都市インフラストラクチャーとして位置づけられ、その経年変化をもとに都市化の進展状況も明らかにすることができる。

第3図は、明治22年、昭和24年、および平成4年の地形図をもとに作成したものである。

明治22年には、この地域は村落的性格を強く持つ地域であり、都市化はほとんど進展していないかったといえる。道路をみても、御土居の内側の洛中ではすでにかなりの区画が形成されているが、この地域では道路は村落および寺院を結びつつ、洛中へと続いていた。方向的にも、東西に伸びる道路が目立っている。

昭和24年になると、明治22年の地形図にすでに記載されていた道路から枝のように新しい道路が伸び、新たな土地区画を形成し始めている。大将軍や花園周辺では比較的規則的な区画が見られるが、「きぬかけの路」沿いの地区では区画化はあまり進んでいない。以上のことから、この年代において「きぬかけの路」沿いの地区では都市化の徵候は見られるが、計画的な開発は進められていないことが明らかである。



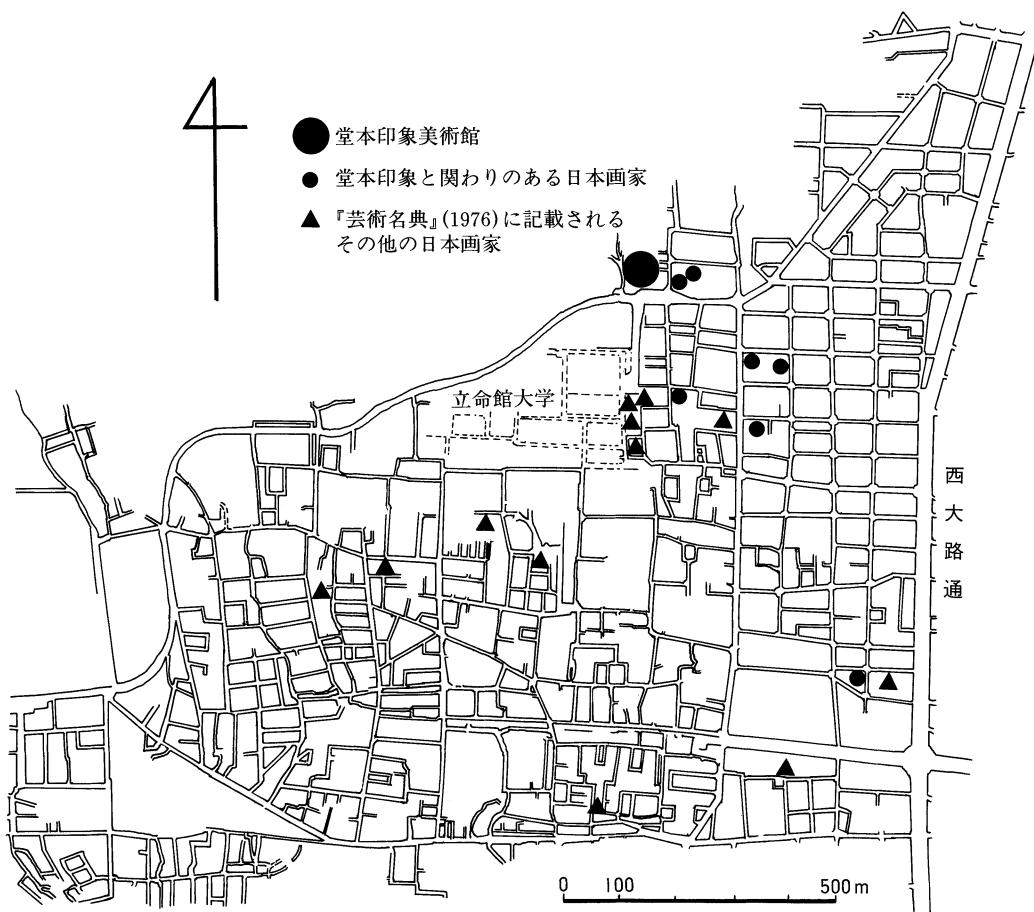
第3図 対象地域及びその周辺の街路網形成過程
(明治22年測量1/20,000地形図 昭和24年測量1/25,000地形図 平成4年測量1/25,000地形図)
(佐野 洋 作図)

平成4年では、道路網は飛躍的に発達し、平野部全域を網羅している。道路の敷設傾向としては、従来の区画にさらに道路を通すことによって土地を細かく分割している。また、この年代までにできた区画は規則的なものが多く、計画性が高いことを表している。前述のように衣笠宇多野線もこの時までに敷設されたのであるが、北大路、西大路、今出川通り、丸太町通りなどの幹線道路もすでに形成されており、昭和24年から平成4年までの間に、道路網の形成が進んだことがわかる。

なお、対象地域のうち馬代通りの東側では、昭和6年から昭和36年にかけて4地区、152.6ヘクタールにおいて区画整理事業が行われてきたので、規則的な区画が整然と並んでいる¹³⁾。他方、西半部にも規則性を感じさせる区画はあるものの、全般的には不規則である。また地価についてみると、この地域の西端部と西大路沿いに比較的高い地区が存在する。

3. 日本画家の居住

「きぬかけの路」の沿道には、堂本印象美



第4図 「きぬかけの路」地域における日本画家の居宅分布（1976）
(黄銀執 作図)

術館が位置している。印象自身は、1975年に他界したが、同美術館は1966年に彼の住居にほど近い場所に建設された。印象は多くの弟子を育成したこともあり、画壇において大きな影響力を持っていた。そして印象を慕って、あるいは恵まれた居住環境を求めてこの地域に転住する日本画家もいた。第4図は資料的にはいさか古いが、1976年の『美術名典』¹⁴⁾に掲載された日本画家の居住分布を示したものである。この地域には19名が居住しているが、とりわけ堂本印象との関わりの強い7名は、堂本印象美術館に比較的近いところに位置していることがこの図から明らか

である。このことは、この地域が創造活動に適した環境を維持してきたことを端的に示している。逆に、複数の日本画家が居住してきたことと、この地域の「佇い」とは決して無関係ではない。

以上のように、当地域の性格を捉える際、仁和寺を始めとする名刹、閑静な住宅地域、そして立命館大学などだけではなく、故堂本印象に代表される日本画家が比較的集在していることを見落とすわけにはいかない。

4. 人口の構成

第1図に示したように、「きぬかけの路」地域は、北区の衣笠・金閣、右京区の御室の



第5図 20~24歳の人口構成比の町別推移（1980~90年）

(京都市総務局統計課『京都市の人口』より作成)

凡例： ■■■ 30%以上 ■■■■ 25%以上30%未満 ■■■■■ 20%以上25%未満 ■■■■■■ 15%以上20%未満
※なお、人口の絶対数が少ない町は、対象から除外してある。

(大迫孝士 作図)

三つの学区からなっている。本節では、学区ならびに町別の国勢調査資料をもとに、1980年と1990年の人口構成を検討する。

京都市の人口構成上の特徴として、20~24歳の学生層と65歳以上の高齢者層の比率が比較的高い。この地域には、立命館大学が位置しているため、前者の特徴が強く現われている。1980年と1990年とを比較すると、上述の三つの学区のうち、衣笠学区では学生層の比率は15.7%から17.3%に増加した。一方、金閣学区では15.7%から15.5%、御室学区では12.8%から12.4%に変化した。

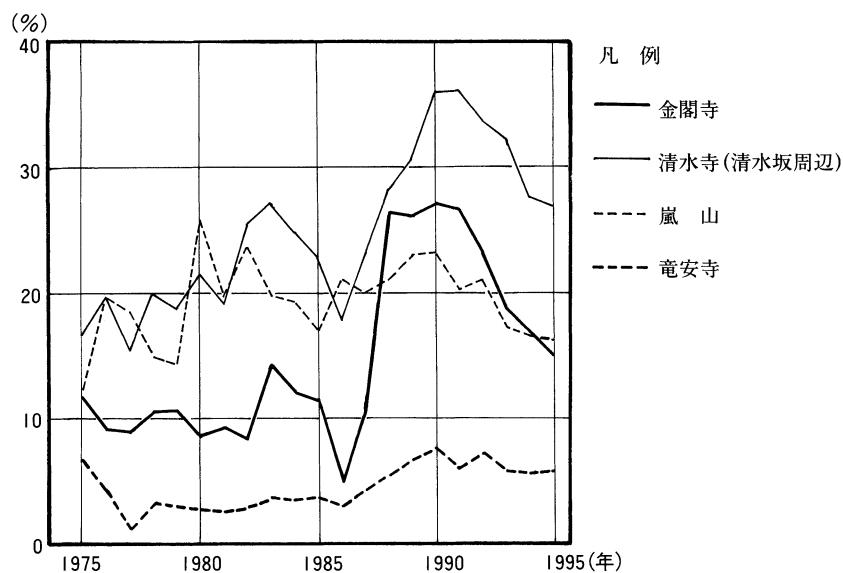
さらにこの変化を、第5図のように町別にみていくことにしよう。1980年では学区レベルでの平均構成比15%を越える町は、金閣学区の山沿いの地区を除けば、立命館大学近隣に限られたが、1990年では15%を越える町は

西大路方面に拡大した。これは学生用の集合住宅が西大路周辺に増加してことが、主な要因である。その典型例は、図中にも指示した平野宮北町である。

他方、高齢者層についてみると、いずれの学区でも高齢者層の構成比は上昇している。なかでも金閣学区では、1980年には7.7%であったが、1990年には10.9%となった。一方、御室学区では、いずれの町でもかなりの高率となっている。

5. 観光客の動態

京都市観光協会による「京都観光基本調査」をもとに、当地域の金閣寺と竜安寺への観光客数を示したのが第6図である。これによると、金閣寺は清水寺（清水坂周辺を含む）・嵐山に比して、観光客数は1980年代中頃までやや低い地位にとどまっていた。しかし、



第6図 観光客の訪問地の動向
(京都市文化観光局『京都市観光調査年報』(各年次)より作成)
※アンケートは、複数回答である。

(大迫孝士 作図)

1987年に金閣の金箔改修が完成し、古都税問題に解決の動きが見られた1988年以降には二者と肩を並べるまでになってきた。近接する竜安寺もほぼそれに連動した伸びを示している。

しかし、観光客の数的な状況は好転しているが、その内訳を年令別に把握すると清水寺と嵐山は、幅広い年齢層の観光客が来ているのに対して、金閣寺と竜安寺には19歳未満の観光客が相対的に多い。この年齢層はおそらく修学旅行生だと思われる。京都市を訪れる修学旅行客数が1988年以降停滞傾向にあることからすると、より幅広い年齢層の観光客をさらにうけいれる努力が当地域には求められているといえよう。

V. むすびにかえて

前章の叙述によって、当地域の地理的性格の一端が明らかになった。運動の課題と展望を見いだすには、本来的には運動自体の分析が行われるべきであろう。したがって本稿の方法は、いさか迂遠なアプローチであったかもしれない。しかし、面的にとらえることによって、この地域の地理的な諸特徴がおよそ把握された。「きぬかけの路」をめぐる運動が今後さらに展開していくためには、沿道に限定して議論するのではなく、面的な、換言すれば地理学的な認識方法が極めて有効である。

その理由として、次の三点がある。まず第一に、衣笠宇多野線に面しない店舗が協議会に加入したのである。この運動はすでに面的な展開段階に到達しているのである。第二に、前述のように、等持院ならびに立命館大学の

国際平和ミュージアムも衣笠宇多野線に面しているわけではない。したがって、この運動の地理的な範囲は当初から線ではなく面であった。そして第三に、地域を発展させようとするこの運動への理解と協力をさらに得ていくためには、地域を構成するさまざまな人々との連帶が必要とされるからである。たとえば、衣笠宇多野線に面していても観光客とあまり関わらない商店、立命館大学の学生、ならびに高名な日本画家の方々など、属性を異にするさまざまな人々との多様な連帶がこれからも形成されていくべきかと考える次第である。本稿が、そのために少しでも役立てば幸いである。

〔付記〕本稿は、1996年度大学院地理学専攻の「地誌学研究Ⅲ」（河島一仁助教授担当）で行った地域調査の結果をまとめたものである。きぬかけの路推進協議会の大槻隆彦氏と部政和氏、有限会社エイブルの中崎良文氏、および堂本印象美術館の古田洋一氏にはたいへんお世話になりました。末尾ながら、謹んで謝意を表する次第です。

注

- 1) 京都市水道局技術本部浄水部疎水事務所『琵琶湖疎水』1988、22頁。
- 2) 堂露小路梅隆『京都疎水水べのものがたり—本当の「哲学の道」—』ナカニシヤ出版、1996、48頁、64頁、105頁。
- 3) 京都市建設局小史編さん委員会編『建設行政のあゆみ』京都市建設局、1983、70-76頁。
- 4) 前掲3) 76-77頁。
- 5) 前掲3) 40-41頁。
- 6) 前掲3) 74-76頁。
- 7) 前掲3) 77頁。
- 8) きぬかけの路推進協議会の大槻隆彦会長（衣笠）と部政和事務局長（京都パストラル）からの聞き取りおよび「きぬかけの路推進協議会」のあゆみ」と、中崎良文氏（エイブル）からの聞き取りによる。
- 9) II章で言及したように、衣笠宇多野線そのものは決して「古い道」ととはいえない。おそらくは仁和寺を始めとする寺院が沿道に位置しているので、「古道」とみなされたものと思われる。

- 10) 元禄14(1701)年の「元禄十四年実測大絵図」
『慶長 昭和 京都地図集成』柏書房、1994)
では衣笠山は「衣掛山」と記されている。なお、
『広辞苑』(第二版補訂版、1976)には衣掛山
について「衣笠山のこと。宇多天皇が六月の盛
夏に雪景色を見たいと、この山に白衣をかけ渡
せたと伝えることからいう。」とある。
- 11) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第11
巻、吉川弘文館、1990、288頁。
- 12) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第10
巻、吉川弘文館、1989、92頁。国史大辞典編集
委員会編『国史大辞典』第14巻、吉川弘文館、
1993、618頁、788頁。
- 13) 前掲3)の付図による。
- 14) 『美術名典』芸術新聞社、1976。
- 15) 前掲14)には、画家個人に関する情報として、
その師匠が誰であるかが記されている。